

日本原産バラについての研究

田中 章研究室

0931168 浜崎 類

1. 研究の背景と目的

我が国の都市における緑地は、人口の都市集中に起因した宅地開発などにより減少の一途をたどり、景観や生態系に変化を及ぼした。そのため、自然的環境の生態的な室を高め、生態系の保全や回復を図るための計画や施策が各地で試みられている。この動きの中では、孤立化した樹林地のような小規模な緑地も、林縁性の生物など少なからぬ種にとっては重要な生息地であり、周辺の自然環境を組み合わせつつ、都市における希少な生物生息地として整備を進めていくことの有効性も指摘されている。また、緑地の確保が非常に困難である都市部においてこそコリドー(生態系回廊)や飛び石状の緑地が重要であると言われており、それらを交互に結び付けることにより、都市全体に野生生物の生息環境としての緑地を形成していくエコロジカルネットワークのシステムをつくることが重要とされている(茂木、柳井、2005)。横浜の緑の総量は減少を続けており、毎年約100haの山林・農地が失われている。緑は一度失われると、回復が困難であり、その保全は緊急に取り組まなければならない課題である。

(横浜市環境管理計画年次報告書、2011) 田中研究室で植栽実験をしているバラは、全てがヨーロッパなどの海外が作出地であり、交配を繰り返して開発されたものである。そのため日本の高温多湿な気候は病気になりやすい環境となっている。

本研究では、日本を原産地とするバラ属植物について調べ、当研究室が目指す壁面緑化に適應できるかどうかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法と研究期間

日本に生育する植物が掲載された図鑑をはじめとする文献、及び WEB サイトを使用して調査した。

期間は8月～12月である。

3. 研究結果

3-1. 日本のバラについて

日本はバラの自生地として知られており、日本原産のバラ属植物は13種類存在している、そのうちハマナス、ノイバラ、テリハノイバラは品種改良に使用されている。これらは現在で

も品種改良を受けて、オールドローズとして苗が販売されている。ノイバラ(*Rosa multiflora*)は房咲き品種を生み出す交配元として、ハマナスはハイブリッド・ルゴサ系の元となった。品種改良に使われる遙か過去の時代にも、「うまら」という呼び名で日本人に親しまれてきた。

江戸時代に園芸が流行したことで、ハマナス(*Rosa rugosa*)やノイバラ(*Rosa multiflora*)をはじめとする国内原産バラが園芸に使用されるようになり、中国からイザヨイバラ(*Rosa roxburghii*)、コウシンバラ(*Rosa chinensis*)などの中国原産のバラ属植物が持ち込まれた。同時に当時の鎖国体制の中で、ドイツの医師・博物学者のシーボルトをはじめとする「プラントハンター」と呼ばれる人々が、ヨーロッパでは珍しいハマナスなどの日本原産のバラを中国原産バラと共に本国に持ち帰り、ヨーロッパのバラと掛け合わせて新しい品種のバラが世界中で作られることになった。このようにして作られたバラが、現代のモダンローズの基礎となったのである。日本産のバラの中で品種改良に使われたことが確認されたのは、わずか3種ほどであった。

また、自然に自生している日本固有種のバラ属植物の一つであるサンショウバラは、幹が太く、群を抜く高さまで生長する。そのため、全国の植物園に展示され、公園の緑化に使われる事例もある。加えて、野生種故に強健なため庭木や鉢植えなどにも使われている。

3-2. 壁面緑化への転用について

調査したバラ属植物のうち、サンショウバラ(*Rosa hirtula*)は他のバラ属植物が1m～3mの高さになるものが多い中、最大5～6mほどという、破格とも言える高さまで生長する。このため、大規模な壁面緑化への利用が期待できる。同様に、ヤマイバラ(*Rosa sambucina*)は長さが大きいもので最大10m前後と、サンショウバラのおよそ倍の長さまで生長する。また、野生種は他の樹木などに寄りかかって生育している。そのため、フェンスなどの立面構造物の緑化に適している。また、最も五感で楽しめる壁面緑化に向いているのは、ハマナスであると思われる。5～8月に花を咲かせ、8～10月に結実するので季節を楽しむことができる。

野生種の他、園芸用に改良された品種も存在する。花の香りが強く、果実は食用になるため生物誘致にも効果があるだろう。次いで、ノイバラも導入を検討してみてもよいと考える。半つる性であるため、フェンスに絡ませやすい。そのため壁面緑化に利用できる。また、初夏に白い花を房状に咲かせ、香りもそれなりに強いと注目されやすい。秋には果実も付けるのでハマナス同様に季節を感じることができる。雑草色が強いと、そのため管理する際には過剰な繁茂に注意しなければならないが、フェンス一面を覆うことが比較的容易にできると思われる。

表1 調査したバラ類

和名(学名)	概要
ハマナス (<i>Rosa rugosa</i>)	強香性、ハイブリッド・ルゴサ。シーボルトが他の植物と共に欧州に持ち帰った。
ノイバラ (<i>Rosa multiflora</i>)	強香性、ポリアンサの片親ツンベルクによって初めて学界に紹介された。
テリハノイバラ (<i>Rosa luciae</i>)	強香性、ハイブリッドウイライアナなどクライミングローズの交配親である。
タカネバラ (<i>Rosa nipponensis</i>)	中部地方以北、四国の亜高山帯に自生する。日本固有種のバラ属植物である。
イザヨイバラ (<i>Rosa roxburghii</i>)	微香性、サンショウバラの変異種、あるいはシネンシスとの交雑種など諸説ある。
ヤブイバラ (<i>Rosa onoei</i> Makino)	別名ニオイイバラ。鉤状のとげで多物によじ登ることによって上に向かって伸びる。
モリイバラ (<i>Rosa jasminoides</i>)	特徴がヤマテリハノイバラに似ているが、こちらのほうが比べると葉肉が薄く、葉の光沢が弱い。
ヤマテリハノイバラ (<i>Rosa onoei</i> Makino var. <i>oligantha</i>)	別名でアズマイバラ、オオフジイバラと呼ばれる。主幹は1.5~2mの高さに伸びるが、他の植物などに寄りかかってつるのように3~5mも伸びることがある。
フジイバラ (<i>Rosa fujisanensis</i>)	成木では堅い木質の幹木となり、径10cm以上に達する。全株に毛がないのが特徴。
ミヤコイバラ (<i>Rosa paniculigera</i>)	フジイバラに似るが、托葉の端にほとんど切れ込みがなく、花の径が一回り大きい。関東、東北地方、北海道にはない。
ヤマイバラ (<i>Rosa sambucina</i>)	野バラの中では最も長く生長し、花も花序一つにつき径3~5cmの花が10~20咲くのでよく目立つ。

引用：邑田仁，米倉浩司（2012）など

4. 結論と考察

ハマナス、ノイバラの2種類が四季を通じて楽しむ壁面緑化に使用するのに向いていると思われる。この2つは現代バラの開発に使われるほどに花が目立つ上、香りも強く、果実も色鮮やかなので海外のバラ属に劣らない景観改善が期待できる。また、日本の多湿な環境に耐性もあるため、病気になりにくいことが考えられる。

ハマナスの野生種は海岸植物のため、直接テニスコートフェンスに植栽すると、土壌の排水力や透水力が砂浜より低いため、枯れてしまう可能性が考えられる。そのため、仮に植栽するのであれば、水はけを特に良くした上で植栽するのがよいだろう。注意点として、棘が密集して生えるので管理の際に怪我をする恐れがあることである。また、関係者以外は枝に触れないように注意喚起を行う必要もあるだろう。ノイバラは野生にも自生しているため育てやすいが、その分繁茂しやすいと、適切に管理しなければ緑化した場所が鬱蒼とした印象を与えてしまう恐れがある。その点を注意すれば、広範囲かつ香りや花の色彩を楽しめる緑化に利用できると考えられる。半つる性なので、登攀のための資材があれば1.5m以上の高さまで育ち、花を房状に咲かせるので大きな景観の改善が行えるだろう。

今回は日本原産バラに絞ったが、原産地の気候がさほどかけ離れていない、中国原産のモッコウバラやナニワイバラが江戸時代に輸入されて以降、日本各地で健全に育っていることを考えると、強健性は原産地の気候と植栽されている土地の気候とかけ離れていないと考えられる。導入するときの問題点として、一部の野バラは非常に強い伸長力を持つため、現在植えられている園芸バラを駆逐してしまう可能性があることである。これは離れた場所に植えることで対処可能であると考えられる。

生物多様性の観点から見ると、日本在来のバラ属植物による緑化は、コリドーの形成において重要な役割を果たすことが考えられるが、緑化の事例が少ないため実際に植栽を行い、長期に渡って観測することが必要だろう。

【主要引用文献】

- 北村四郎, 村田源 (1979) 原色日本植物図鑑 木本編 II 大阪
 横浜市環境管理計画年次報告書 (2009) 横浜市環境創造局総合企画部環境政策課 43pp
 邑田仁, 米倉浩司編 (2012) APG 原色牧野植物大図鑑 1 ソテツ科~バラ科 東京 647pp